YNUの研究力 file No.12

為替レート変動の影響を考えよう

日本企業は為替リスクにいかに対処しているのか

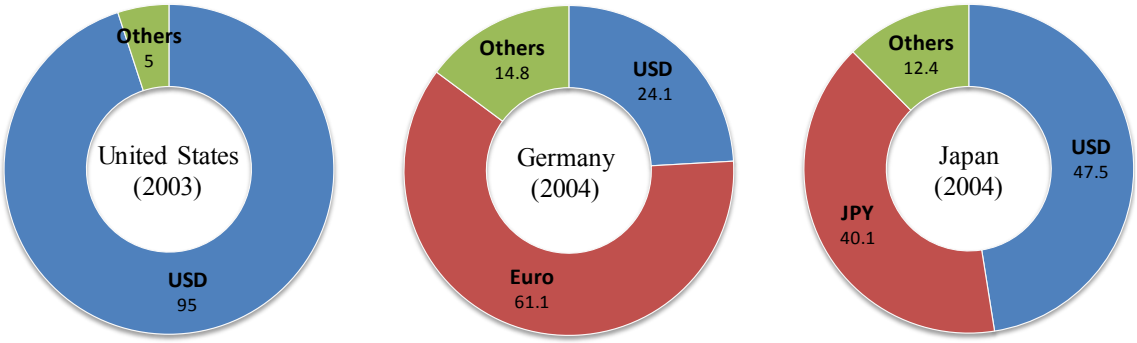
横浜国立大学 大学院国際社会科学研究院 教授

佐藤 清隆

為替レートは大きく変動

日本経済は大幅な為替レートの変動を常に経験してきました。1971年まで、日本は1ドル＝360円の固定レート制を採用していましたが、その後、変動レート制に移行し、急激な円高を何度も経験しました。2011年には1ドル＝76円を割り込むまで円高が進みましたが、2012年末からのアベノミクスによって急激な円安へと転換し、現在に至っています。

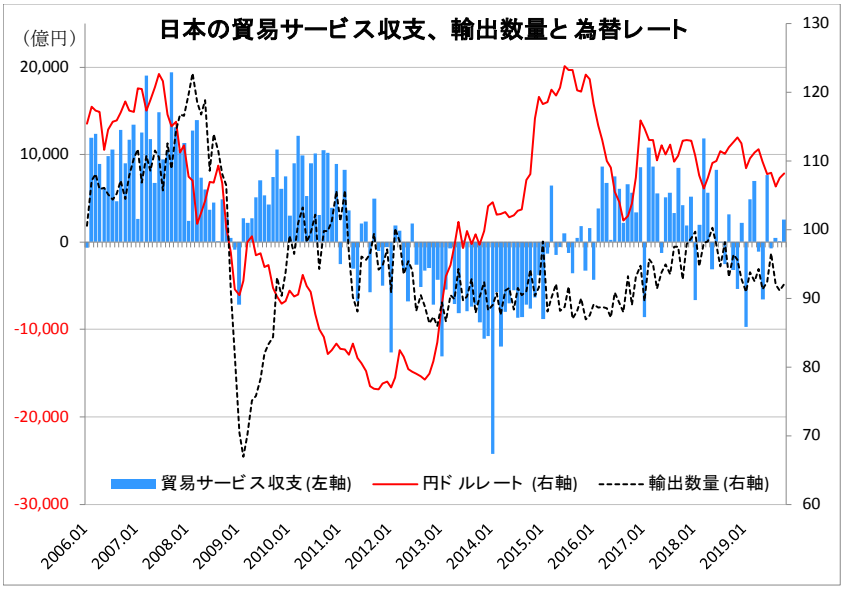
日本の輸出の６割は外貨建て



しかし、日本は輸出の約6割を外貨建てで契約する点で他の先進国と大きく異なります。輸出代金を外貨で受け取るので、その時点の為替レートで円に交換しますが、急激な円高局面では円の手取りが減ってしまいます。「なぜ日本企業はドルなどの外貨で輸出契約を行うのか」という研究課題に多くの研究者が取り組んでいます。

為替レートと輸出、貿易収支の関係は？

為替レートの変動は貿易収支や輸出とも深く関係していると知られています。円高（円安）が進むと輸出が減少（増加）し、貿易収支は悪化（改善）すると考えられてきました。しかし、下の図が示すように、2012年末から2014年末までの急激な円安局面で、日本の貿易赤字はむしろ拡大しました。



このような日本全体の貿易赤字の拡大を考える上で、個別企業の輸出行動や為替レート変動への対応策がどのように行われているかを調査・分析することは非常に重要です。私は、円高・円安が日本の輸出や貿易収支に影響を及ぼすというマクロ的な現象を解明するために、個別企業へのインタビューやアンケート調査の実施と分析を行いました。その結果、日本の中小部品メーカーなど、規模は小さくても圧倒的な技術力を持つ企業であれば、その競争力を背景に海外の企業に対しても円建てでの取引を要求できていることが見えてきました。

今後も、ミクロの視点から為替レート変動に対する企業の為替リスク管理や貿易契約通貨の選択などの実証的な研究を続けると共に、研究成果を積極的に発信し、調査にご協力頂いた企業や経済界に貢献したいと考えています。

この研究に取り組んでいるのは

佐藤 清隆 (さとう きよたか)

横浜国立大学 経済学部／大学院 国際社会科学研究院 教授

東京大学 大学院経済学研究科 博士課程単位取得。博士（経済学、東京大学）。(財) 国際東アジア研究センター研究員を経て現職。趣味は空手。全国大会の組手の部で優勝経験あり。道場の副支部長として、週末は小学生から大人まで、組手を指導。

本棚
参考図書のご紹介

高校生向け書籍

- デヴィッド・ビアンキ、関 美和『お父さんが教える 13歳からの金融入門 』（日本経済新聞出版社、2016年）
- 上野 泰也『No.1エコノミストが書いた世界一わかりやすい為替の本』（かんき出版、2018年）

とても読みやすい、一般向けの入門的解説本です。

より詳しく知りたい人は（専門向け）

- 橋本 優子、小川 英治、熊本 方雄『国際金融論をつかむ 新版』（有斐閣、2019年）
- 清水 順子、大野 早苗、松原 聖、川﨑健太郎『徹底解説 国際金融 理論から実践まで』（日本評論社、2016年）

大学生になってから読む、優れたテキストです。

最近の著書・論文

- Ito, T., S. Koibuchi, K. Sato and J. Shimizu, 2018, *Managing Currency Risk: How Japanese Firms Choose Invoicing Currency*, Cheltenham, UK: Edward Elgar (ISBN: 978 1 78536 012 1).
- Nguyen, T.N.A. and K. Sato, 2019, “Firm Predicted Exchange Rates and Nonlinearities in Pricing-to-Market,” *Journal of the Japanese and International Economies*, 53.
- Nguyen, T.N.A. and K. Sato, 2020, “Invoice Currency Choice, Nonlinearities and Exchange Rate Pass-Through,” *Applied Economics*, 52(10), pp.1048–1069.